

「国際的な情報発信のためのe-learningによる人材養成プログラム」に関する Learner Autonomy についての一考察 II

小林 貢

An Introduction to English Education Program of Akita National College of Technology: On e-learning and Writing Exercises Reconsidered by the Concept of Learner Autonomy Part II

Mitsugu KOBAYASHI

(平成22年11月26日受理)

It should be taken into consideration that e-learning and writing exercises by native speaker are the essential tacklings for the English Education of Akita National College of Technology. In addition to that, Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology recommends students to deepen their learning of their special fields and to have the practical English ability, which EDC and Washington Accord also recognize necessary qualifications for learning.

The purpose of this paper is to suggest an approach to improve the spontaneous educational abilities (containing English ability) for our students by using e-learning and Writing Workshops based on the ways of thinking of Learner Autonomy, Finland Method, DeSeCo Key competency and JABEE.

We have been making many attempts to establish students' voluntary English learning and let them know the world-wide point of view for engineering design. If they keep studying their specialities autonomously and communicate with foreigners in English, they can contribute to the world as international engineers attributed to Learner Autonomy.

1. 緒言

1980年代以降における教育の流れとして、「成果主義教育」が存在し、それは、基準テストに基づいた学生の達成度の結果により、教員が結果責任を問われることを原則とした教育政策で、アメリカを中心とした英語圏諸国からのグローバルな教育改革の傾向であった。これは、Teacher Controlによる典型的な教員からのアプローチによる、基準テストを中心とした評価に基づく教育である。しかしながら、最近のフィンランドにおけるPISAの結果から注目を浴びたFinland MethodやOECDの「学習者の学ぶ意思を重視する」Learner Autonomy的な視座が再評価されている。これは、Teacher Control重視からLearner Autonomy重視へのヨーロッパ的な視座に基づく、教育的なアプローチのコペルニクス的

転回であると考えられる。

このような状況の中で日本は、基準テストに基づいたTeacher Control重視のグローバルな教育改革に逆らい、Interactive 且つLearner Autonomy的な「ゆとり教育」に取り組んだものの、2000年頃からの「学力低下」の原因は「ゆとり教育」に内在するという批判から、「ゆとり教育」は頓挫した。そして、日本の教育はTeacher Controlによる典型的な教員からのアプローチと基準評価を重視する教育へと回帰したのである。

このような状況において、高専改革推進経費事業はLearner Autonomyをどのように進められるべきであろうか。学生の自主性を尊重し、基準テストに囚われないLearner Autonomyを推進するためには、逆説的に基準テストを最低限の指標として活用し、それをクリアした意欲的な学生を対象として、

Learner Autonomyに基づく特別講義や自主学習を実施するということが、筆者の見解である。

つまり、「国際的な情報発信のためのe-learningによる人材養成プログラム」の平成21年度実施においてLearner Autonomyに基づくWriting特別講義である「情報発信のためのLesson」の受講を希望する学生は、基準テストであるTOEICにおいて、最低限の指標であるスコア400点をクリアしていなければならない。更に「情報発信のためのLesson」を受講を希望する学生は、自らの人生の質を高めるための主体的な姿勢を持つresponsible learnerとしての姿勢を示すために、事前に60分の時間で作成した"Why should we study English?"の英文サンプルを担当教員に提出する必要があるのである。これにより、Learner Autonomyに適応できる学生に対して、ネイティブの招聘講師による英語のみの5日間のライティングのプログラム「情報発信のためのLesson」は平成22年3月に実施されたのである。

このようなアプローチはもちろん平成21年度における自主学習にも当てはまり、TOEICにおいて最低限の指標であるスコア400点をクリアした学生には、更なる高得点を目指すために、ALC NetAcademy 2「スーパースタンドコース」を自由に活用できるe-learning教材として情報処理センターでの自主学習を勧めた。

今回の論文においては、「情報発信のためのLesson」を中心とした「国際的な情報発信のためのe-learningによる人材養成プログラム」の取り組み自体に関する考察を行う。それは、「学生自身が、自身の目標の選択や探求を明確するために主体的且つ省察的に思考行動し、他者とのInteractiveな関係性に基づき、知識の構成と更新の方法論を確立すること」を導くことを目的とした教育観が、評価されてきている昨今においては、教員もそれに対応するためにInteractively且つautonomouslyに何ができるかを熟慮し、行動することが、今後の日本の教育においても必要とされていると考えられるからである。

それでは、「国際的な情報発信のためのe-learningによる人材養成プログラム」の平成21年度において国際教養大学教授Dr. Kirby Record先生を招聘して開講したWriting特別講義である「情報発信のためのLesson」の実施についての考察をLearner Autonomyの観点から行う。

2. Learner Autonomyと「情報発信のためのLesson」

Learner Autonomyのためには、学習者本人が自らの意思で学習することにより、自らの人生の質を高めるための主体的な姿勢を持つresponsible learnerたりえるか、否かが、成否の鍵となりえる前提であり、そのためには、情報を批判的に検討することも必要とされる。そして、Learner Autonomyを成功への導くためにはTeacher Controlが必要であり、具体的には、人的、物的なresourceが必要である。それらに加えて、Learner Autonomyを上手く作用させるためには、Teacherとlearnerの間やlearner間のCommunicationが必要不可欠となる。このことを踏まえて、「情報発信のためのLesson」に参加した学生12名の中、3名の学生A, B, Cに焦点を当てて、"Why should we study English?"の英文サンプルを具体的に上げたい。

2.1. 英文サンプル

以下は学生Aの英文サンプルである。

Now, English is the language that most spoken all over the world and Japan expanding business for the foreign market in various field. Also more and more people go to abroad. For this fact, English is the tool that useful and convenient for communication. For example, if we can use English, we can tell the Japanese culture and attraction to foreigner. And as a result, the foreigner come to Japan and this bring a profit to Japan. English is indispensable for Japanese profit of the country. So we should study English.

次に、以下は学生Bの英文サンプルである。

To tell the truth, I don't know why we should study English. I can't help thinking that we need not study English in Japan. Because it seems that there is no chance to use English in daily life. So if we live a normal life in Japan, the chance to use English is maybe basically zero. We could get almost everything we need to live without using English.

But in industrial or business field, we would encounter many scenes to use English. For example, reading a datasheet and instruction, communicating with abroad employee and customer, introducing products to foreign companies and so on. In this case, we must use English.

We've been studied English for 7 or 8 years. But I think it's really superficial knowledge. We cannot communicate well in English with foreign people because our English is based on "reading (translating)". Certainly, we can translate English into Japanese with dictionary, but we cannot speak English naturally as we always speak Japanese. We may not be able to even give a speech in English. I still feel the need to study English more in order to achieve deeper communication.

Now, we need to study English not for the exams in school but for communicating with non-Japanese people. In company, it may be quite usual to use English to communicate foreign companies and customers. Maybe English is one of the most important tools in our global society. I think we have to obtain a communicative English skill. Not only reading and translating but also speaking and writing is needed for us in the age of globalization.

最後に、以下は学生Cの英文サンプルである。

We study English to become an expert engineer or researcher. An engineer and a researcher always collect information they need. If they can read English, they will collect English information as well as Japanese information. So they have an advantage over an English-speaking people who read only English.

An engineer and a researcher may be forced to do many international tasks, such as a joint research with a foreign company, English theses, an international society presentation, and so on. The ability of doing these tasks enable an engineer to show his ability of engineering and a researcher to extend his field of research. Although we will acquire the ability of English which enable us to do these tasks after we become a working member of society, English that we are studying now is a base for practical English.

このように英文サンプルの内容には英文の質及び量の違いや間違いがあるものの参加する学生の意欲が現れたものとなっている。次は、「情報発信のためのLesson」において実施された内容である。

2.2. Schedule of Activities for Writing Workshops

March 15

Introduce paragraph structure: topic sentence,

body, and conclusion. Example paragraph analysis; practice in small groups.

Looking at your writing; reviewing.

Free writing for fluency.

Assignment #1: Your family, your community, your country.

March 16

Free writing.

Review of paragraph structure.

Grammar lesson #2: The clause and the sentence: fragments and run-ons. Error correction in groups.

Peer review. Revision in class.

Watching a movie: free writing & discussion.

Assignment #2: My hobbies and why I like them.

Revise Assignment #1

March 17

A movie : watching and writing. Discussion.

Grammar lesson #2; error correction practice

Feedback on Assignment #1 from March 15.

Peer review of Assignment #2 from March 16th.

Assignment #3: Topic to be selected; Revise

Assignment #2

March 18

Watching a movie: free writing & discussion.

Peer Review, Assignment #3

Feedback Assignment #2; revision of Assignment #3

Assignment #4: Writing about a movie.

March 19

Watching a movie: free writing & discussion.

Peer Review Assignment #4

Feedback of Assignment #3

The extended essay. Examples and discussion.

Conclusion of workshop

2.3. 「情報発信のためのLesson」レポートと考察

以下は学生Aのレポートである。

今回私はカービィ先生の授業を受けて、語学をスキルアップさせるためには失敗を恐れないことが大切だということを学びました。今までの私は失敗を恐れて、自分の考えや意見を言うのをためらうことが多くありました。特に、母国語以外の言語で自分の考えを述べることにはとても恥ずかしさを感じていました。しかし今回の授業を受けて、失敗は恥ずかしいことではない。むしろ、スキルアップのためには必要であることが分かりました。

また、カービィ先生は学生の良いところを見つけ、

ポジティブな言葉を多く使っていると感じました。私は日本人の先生は、学生のポジティブな面にあまり注目せず、ネガティブな面にばかり目を向ける傾向があると感じています。例えば、スペルミスや文法の間違いです。カービー先生は間違いだけでなく、良いところも指摘してくださいました。それによって私はとても勇気づけられ、今後同じ失敗を繰り返さないように意識することができました。日本人の先生方もこれからは教育において褒めるということが大切ではないかと感じました。

今後は英語を使うことにおいて失敗を恐れず、出来る限りフリーライティングを続け、英語で自分の考えを述べる力を養っていきたいと考えています。

次に、以下は学生Bのレポートである。

今回、この特別講義の話をご宮田先生から受けた時は、正直に言うと面倒くさいなあと思っていました。それは春休み中にわざわざ学校まで出てくるのがとても大変に感じられたからですが、それでも受けようと思ったのは、やはり普通の授業ではなかなか得られないものを得られるのではないかと感じたからです。

英語の授業というところ、どうしても英文和訳、そしてそこからの読解が中心となっていました。高専での英語の講義、はたまた中学校の授業も、そういった英文をただ和訳するだけのものが非常に多かったように思います。あるいは単語練習、文法などの基礎的な部分の練習が中心となっていて、何かを書いたりするような時間は非常に少ないものでした。そういった部分において、この授業で自分のスキルをアップさせることが出来るのではないかと、そういう風に考えて授業へと臨みました。

初めは、何から何まで英語での授業だったので緊張していたのですが、意外と聞き取れていることに驚きました。もちろん、カービー先生が簡単な英語を選んで使ってくれていたからだとは思いますが、ネイティブの人の英語を聞き取れたと言うことは、自分の中では大きな自信に繋がりました。フリーライティングの時は、何を書いたらいいのか、どうやってトピックを探してくればよいかがよく分からずに戸惑うこともありましたが、2、3日もするとだいたい慣れてきて、思ったことをすらすらと書いていけるようになりました。

フリーライティングについての話を聞いて、二つ感じた事があります。一つは、間違いを恐れないことです。英語の授業がかっちりとした文法、スペルを求めているせいで、今までは英文一つを書く時さえ、細部にまで気を払ってしまう癖があります。

この単語はこういう使い方でいいのだろうか、スペルはあるのだろうか、文法は間違っていないのだろうか。そういうことを考えながら文を組み立てていくために、自分が本当に書きたいことを書けずにいることがしばしばありました。しかし、間違いを恐れずに書いてもいいのだと言われると、肩の力が抜けたように、すらすらと書いていけるようになった気がします。当然、どこかに間違いはあると思いますが、とにかく書いていくことが自分の書く力を向上させる第一歩になるのだと実感しました。

もう一つは、先ほども少し述べたのですが、とにかく書き続けることです。間違いを気にせずに、どんどん書いていくことに初めは抵抗を感じたものです。それはやはり、今まで自分が受けてきた英語の授業とは大きくかけ離れているからですが、様々なことに縛られて自由に書くことも出来なかった時よりも、ずっと楽しくライティングに触れることが出来たと思います。自分の言いたいこと、感じたこと、見たことをとりあえず何でもいからカタチにするという作業は非常に面白く感じられました。

最後に、以下は学生Cのレポートである。

感じたこと

一日目の授業でこのプロジェクトがライティングを中心にしたものであると聞いたとき、本科の授業でライティングの授業を受けたことが全くなかったので新鮮に感じ、同時に付いていけるか不安に感じた。しかし、一日目のfree writingや英作文の宿題で実際にライティングをしてみて、思っていたより自分にライティング能力があると感じ、またKirby先生が優しかったので、当初の不安は解消された。

学んだこと

英文の構成の仕方(段落、タイトルの書き方、インデント)、文法的な知識など、ライティングに必要な基本的なことを学んだ。ライティングの勉強するのはほとんど初めてだったので、ライティングの基本中の基本といえるような初歩的なことも初めて学ぶことだったと思う。

すべきこと

自分が本科で学んできた英語は、リスニングやリーディングのように、はじめから英文が与えられている授業がほとんどであった。また、TOEICもリスニングとリーディングに分かれているため、自学においてもそれらの勉強を重視していた。それゆえ、ライティングのように自分で英文をつくることに関してはあまり自信を持っていない。しかし、実際はリスニング、リーディング、ライティングは平等に重要なことだと思う。今回のプロジェクトを終

えて、ライティングのように自分で英文を作る技能を身につけることが今後すべきことだと感じた。

Learner Autonomyにおいては、自らの知の主体的構築とそのための自己学習能力が目標とされており、フィンランドのFinland MethodやEUにおけるDeSeCo（コンピテンシー定義・選択計画）（最終報告書2003年）におけるKey competencyと密接に関係すると考えられる。具体的には、Finland Methodは、発想力、論理力、表現力、自らの思考に対しても客観的な「批判的思考力」に重点が置かれており、フィンランドの学校とは「知識の構成の方法論」を教える場なのである。そして、DeSeCoにおけるKey competencyは以下の3点である。

Use tools interactively (e.g. language, technology)

Interact in heterogeneous groups

Act autonomously

学生がレポートに記述したことから考察すると、Learner AutonomyとFinland MethodやDeSeCoのKey competencyの共通項としてCritical Thinking「批判的思考能力」やInteract「情報交換、交流」及びAutonomous Learningによる「自分自身の目標の選択や探求を確立するための主体的且つ省察的な思考と行動」が挙げられ、今回のネイティブ教員であるDr. Kirby Record先生による「情報発信のためのLesson」におけるWriting特別講義の試みは「知識の構成の方法論」を教える場として機能し、参加した学生12名が「主体的且つ省察的な思考と行動」を試みるための「交流」の機会となったと考えられ、通常の英語教育に対する「批判的」なコメントもあるものの、学生は、英語により交流し、ネイティブ教員から刺激を受け、自律的に「情報発信のためのLesson」に参加することにより、この特別講義に対する評価は総じてとても高いものであった。

3. 「国際的な情報発信のためのe-learningによる人材養成プログラム」平成21年度報告書及び総括

以下は当プログラムの高専機構への平成21年度報告書である。

高専名：秋田高専 事業区分：国際

事業名：「国際的な情報発信のためのe-learningによる人材養成プログラム」

3.1. 事業概要

e-learningによる英語学習により、TOEICに十分対応できることで、国際的に活躍できる人材の養成を図ると共に、情報発信の推進のためにライティン

グのプログラムの演習を行うことで、学生が国際学会等で専門に関する発表をできるための英語力の素地を養成する。

3.2. 成果・評価

○地域に於ける評価

秋田高専と国際教養大学が密接かつ有機的な連携体制を形成した上で、学生が国際学会等で専門に関する発表をできるための英語力の素地を養成するPBLとして国際教養大学教授Dr. Kirby Record先生によるライティングのプログラム「情報発信のためのLesson」の実施が秋田魁新報に掲載された。(2010年4月8日掲載)

○学生の評価（上記のプログラム参加学生12名修了時 アンケート：本プログラムを受講して良かったか？）100%が「強く思う」と回答。

コメント：「授業自体は大変だったが、いい体験になった」「非常に面白く感じられました」「英語で自分の考えを述べる力を養っていきたい」他

○留学生データ

上記プログラム参加学生12名中、1名が短期留学。(平成22年度)

このように「国際的な情報発信のためのe-learningによる人材養成プログラム」は平成21年度において上記の成果を上げ、十分な評価を受けた。当プログラムは2年の継続事業であるので、以下に平成22年度高専改革推進経費事業課題について説明する。

4. 「国際的な情報発信のためのe-learningによる人材養成プログラム」平成22年度高専改革推進経費事業課題について

4.1. 課題の仮説、課題の明確化

e-learningによる英語学習やネイティブの大学教員による専門分野に関する講演会は、学生の英語力の向上について有効であるという仮説に基づき、このプログラムを実施する。e-learningを授業に導入することにより、学生の英語力向上のみならず、「国際的な情報発信」を目標とした授業（Writing, TOEIC, 工業英語をテーマとした授業）を展開し、「国際的な情報発信」の実例として、ネイティブの大学教員による専門分野に関する講演会に学生を参加させる。それにより、理工系の学生には、いかに英語による「情報発信」能力が必要であるかを自覚させることで、学生の英語学習へのモチベーションを高めると共に、学生に英語を学習する本質的な理由と目的を認識させ、更なるe-learningの演習を重

ねることにより、国際的な工業技術者を育成するための英語の礎とする。

4.2. 課題解決方法の明確化

英語の授業にe-learningを導入する。具体的には、ALC NetAcademy2「技術英語パワーアップコース」は5年物質工学科の「工業英語」の授業に導入することで、DHAについての論文をe-learningする。前期から継続して実施する授業としては、4年電気情報工学科及び4年物質工学科の「総合英語Ⅰ（通年）」の後期の授業に引き続きALC NetAcademy2「Writing基礎コース」を使用して、チャンクを使った英作文及び前置詞についてe-learningする。それに加えて、前期の専攻科1年の「応用英語Ⅰ」及び専攻科2年の「応用英語Ⅲ」から継続して、後期の専攻科1年の「応用英語Ⅱ」の授業においてもTOEICをテーマとしたALC NetAcademy2「スーパースタンドコース」を継続して使用する。そして、ALC NetAcademy2「TOEIC（R）テスト演習2000コース」は自主学習教材として使用する。それに加えて、ネイティブの大学教員による専門分野に関する講演会を本科5年生を対象として実施する。上記のアプローチを総合的に実施することにより、「国際的な情報発信」のためのモチベーションを高めることで、英語力を向上させる。

4.3. 評価指標及びその達成度の明確化

e-learningについては、上述したように授業に導入するので、e-learningにおける個々の評価指標は、授業における評価を指標とする。なぜならば授業で演習した内容は、定期試験において確認され、それがTOEICスコア等に反映されると考えられるためである。英語力の向上については、前年度よりも難易度を高めている教材から出題された問題を定期試験において解答できるかによって評価される。具体的には、ALC NetAcademy2「技術英語パワーアップコース」を使用する5年物質工学科の「工業英語」の授業においては、DHAについての論文をe-learningすることにより、「工業英語が更に読めるようになる」ことが確認できる。4年電気情報工学科及び4年物質工学科の「総合英語Ⅰ（通年）」の授業においては、ALC NetAcademy2「Writing基礎コース」を使用して、チャンクを使った英作文及び前置詞についてe-learningすることで、「英作文が更に書けるようになる」ことが確認できる。そして、後期の専攻科1年の「応用英語Ⅱ」の授業においてもTOEICをテーマとしたALC NetAcademy2

「スーパースタンドコース」を継続して使用することにより、「TOEICが更に解けるようになる」ことが確認できる。そして、本科3年時に全員受験したTOEICスコアよりも本科4、5年及び専攻科1、2年の授業におけるe-learningの演習後に受験したTOEICスコアがより高得点となるならば、それは客観性を持つと考えられる。全体的な評価指標、達成度（具体的な数値目標）は後述する。前期に「応用英語Ⅲ」を受講した専攻科2年の学生で、JABEEに関連してTOEIC400点相当（TOEIC385点）をクリアできなかった学生は、それと同等の英語能力を示すために特別研究についての英語プレゼンテーションを実施する。具体的には、クリアできずに課題に取り組んだ専攻科生は、平成18年度は18名中1名、平成19年度においては28名中0名、平成20年度は23名中2名、平成21年度は27名中1名であった。平成22年度においても0名を目指す、必要があれば英語プレゼンテーションを実施する。

平成18年度において専攻科の評価指標である大学院におけるTOEIC平均スコア479点を超えた専攻科生は7名おり、最高点は635点であった。平成19年度の大学院におけるTOEIC平均スコアの484点を超えた専攻科生は5名おり、最高点は660点であった。平成20年度の大学院におけるTOEIC平均スコアの491点を超えた専攻科生は6名おり、最高点は745点であった。平成21年度の大学院におけるTOEIC平均スコアの494点を超えた専攻科生は7名おり、最高点は855点であった。e-learningによる英語学習やネイティブの大学教員による専門分野に関する講演会を援用した、このプログラムにおける評価指標、達成度（具体的な数値目標）は、今年度の大学院におけるTOEIC平均スコアとして推定されるTOEIC500点相当の専攻科生をこれまで以上に育成することである（今までの最高は7名）。また、学生がこのプログラムに直接的及び間接的に関係することにより、平成22年度における「国際性の向上」に関する進展において、学生の留学者（短期留学者含む）もしくは国際学会での発表者を1名でも育成することである。（平成21年度における学生の留学者もしくは国際学会での発表者は0名）

4.4. 工程計画の明確化

4.4.1. 平成22年9月30日まで

ALC NetAcademy2「技術英語パワーアップコース」及び「TOEIC（R）テスト演習2000コース」をインストールし、動作確認する。（完了済み）

4.4.2. 平成22年10月1日～平成23年3月31日

ALC NetAcademy2「技術英語パワーアップコース」を5年物質工学科の「工業英語」の授業に導入する。4年電気情報工学科及び4年物質工学科の「総合英語 I (通年)」の後期の授業に引き続きALC NetAcademy2「Writing基礎コース」を使用する。

後期の専攻科1年の「応用英語II」の授業においてもTOEICをテーマとしたALC NetAcademy2「スーパースタANDARDコース」を継続して使用する。

「TOEIC (R) テスト演習2000コース」を自主学習教材として学生に使用させる。

4.4.3. 平成23年 1 月

本科5年生を対象としてネイティブの大学教員による専門分野に関する講演会を実施する。

5. 「国際的な情報発信のためのe-learningによる人材養成プログラム」平成22年度実施状況 まとめ

「国際的な情報発信のためのe-learningによる人材養成プログラム」は平成21年度において「情報発信のためのLesson」を中心とした実施により、前記のように高い評価を受けた。また、平成22年度においては、本科5年生を対象としてネイティブの大学教員による専門分野に関する「国際的な情報発信のためのe-learningによる人材養成プログラム講演会」は、国際教養大学 助教のDr. Andrew J. CROFTS先生を講師として平成23年1月20日(木)に実施する予定である。

事業目的は「平成22年度においては、ネイティブの大学教員の平易な英語による専門分野に関する講演会を実施することにより、学生が国際学会等で専門に関する発表をできるための英語力及びプレゼンテーション能力の素地を養成する。」である。プログラムは「講師のCROFTS先生が作成された資料を事前に学生に配布することで理解を深める。またパワーポイントを活用した講演会とする。国際教養大学においてCROFTS先生が開講しているIntroduction to Biologyの講義のSummaryを中心として、CROFTS先生の専門の研究内容を含んだ内容の講演会とする。1. 講師紹介 2. 講演 3. 質疑応答 の順で行う」である。

そして、この事業により、resourceとしてのALC NetAcademy2 (e-learningソフト) の下記のインストールが完了した。以下は買い取りした4ソフトで利用期限は無いものである。[スーパースタ

ANDARDコース, ライティング<基礎>コース, TOEIC (R) テスト演習2000コース, 技術英語パワーアップコース]

以下は2012年3月まで利用できる10ソフトである。[医学英語<基礎>コース, 技術英語<基礎>コース, 中国語コース, PowerWordsコース プラス, 英語入門コース, スタANDARDコース, 基礎英語コース, 英文法コース, 日本語コース, ITサポートコース (語学以外)]

これに加えて、本校においては、平成22年10月1日より、学外からe-learningが出来るようになった。

「国際的な情報発信のためのe-learningによる人材養成プログラム」平成22年度実施についての詳細な報告は、またの機会とする。

謝辞

「国際的な情報発信のためのe-learningによる人材養成プログラム」における「情報発信のためのLesson」実施にあたり、以下の先生方のご協力をいただいた。国際教養大学Dr. Kirby Record先生、本校 電気情報工学科 宮田克正先生、本校 環境都市工学科 対馬雅己先生。心より感謝申し上げます。

参考文献

- Pasi Sahlberg, Education Policies for Raising Student Learning: The Finnish Approach, *Journal of Education Policy*, Vol22, No.2, 2007.
- Autonomy and Independence in Language Learning edited by Phil Benson and Peter Voller, Longman, 1997.
- 福田誠治 「フィンランドは教師の育て方がすごい」株式会社亜紀書房, (2009.3)
- 小林 貢 『「国際的な情報発信のためのe-learningによる人材養成プログラム」に関する Learner Autonomyについての一考察』秋田工業高等専門学校研究紀要 第45号, pp.93-98. (2010.2)
- 小林 貢 「秋田高専における英語教育とJABEE, e-learning, ESP, EGP」秋田工業高等専門学校研究紀要 第44号, pp.100-106. (2009.2)
- 小林 貢 「英語教育とe-learning『秋田工業高等専門学校における実践的英語 コミュニケーション能力の育成のための取り組み』」ALC NetAcademy通信 No.48 (2008.5.28)